

広東語話者による二字漢語の誤答の分析
—長音の読みに注目して—

An error analysis in Two-character Sino-Japanese Words by Cantonese Speaker:
Focusing on the reading of cho-on

郡司 拓也
嶺南大学

要旨

漢字圏学習者を対象とした漢字教育に関する研究は近年、増えており、母語における漢字の知識を活用し、日本語の漢字の習得しようという試みが見られるようになってきた。しかしその大半は中国語標準語話者を対象とするものであり、広東語話者を対象としたものはまだあまり多いとは言えない。

本研究では広東語母語話者を調査対象とし、二字漢語に用いられている字音の読みの誤り、特に長音に注目した。長音を含む漢字を非長音化してしまう誤答と非長音を長音化してしまう誤答を比較、その傾向を分析した。その結果、長音の誤答は単純な長短音の混同だけでなく、母語の漢字の発音の干渉と思われる傾向が見られることが明らかとなった。

キーワード:

広東語話者、二字漢語、長音、誤答分析、母語干渉

広東語話者による二字漢語の誤答の分析 —長音の読みに注目して—

郡司 拓也
嶺南大学

1. はじめに

漢字の読みにおいて、清音と濁音を混同した誤りと並び、長短音の混同など、長音の読みが正しくできていない誤用は漢字圏学習者、非漢字圏学習者を問わず、しばしば観察される。確かに字訓語に関しては長短音の混同が誤用の主な原因であるように思われる。しかし字音語に関しては、長音の読みの誤りは単純な長短音の混同だけではなく、長音と撥音が混同されているような誤用も多く目にしてきたことから、学習者の母語の漢字の発音が負の転移を起し、母語干渉による誤用を引き起こしているのではないかと思うに至った。

郡司（2018）では二字漢語の促音化、濁音化、半濁音化の誤答分析を通じ、学習者が誤りやすい傾向を把握することで、学習者の母語の漢字の知識を生かした効率的な文字、語彙学習に繋げていくことを目指したが、本研究でも同じ方向性で、長音に関する学習者の誤答の傾向を分析し、実態を明らかにしていく。

2. 先行研究

日本語以外の漢字音と日本語の字音との対応関係を分析し、その法則性を漢字圏学習者の日本語の字音の習得に役立てようという研究は薛（2013）や黒澤（2016）など近年、数多く見られるようになってきた。やはり中国語標準語が多いが、李（1992）のように、広東語話者を対象とし、旧常用漢字表に現れている字音を広東語の漢字音と対照させ、広東語の漢字音と日本語の字音との法則性を示したものもある。例えば、本研究で扱う長音に関わる法則としては1.「入声音の p 音とウ段長音、オ段長音」、2.「鼻母音の ng 音と長音」、3.「母音の iu 音とオ段長音」の3つが特に法則が適用されるものが多く、有用であると紹介されている。確かに学習者にとって、このような研究は有益なものであるといえるだろう。しかし、上記の3つ以外にも日本語で長音に対応する広東語の漢字音は存在し、また法則が適用されず、例外となる漢字音も少なくない。法則の種類と例外の多さがこのような研究成果を教育で実践する際に問題となってくる。その際、学習者が誤りやすい漢字音の傾向がわかれば、数多くの法則の中から教育効果が高い法則を選び出すことができるのではないだろうか。そのために必要となってくるのが誤答分析である。

漢字の読みに関する誤答分析は濱田・高島（2009）のように中国人学習者を対象としたものや兒島（1998）のように香港の広東語話者を対象とした研究もある。いずれも比率は異なるものの、音韻に関する誤答は長短音の誤り、清濁音の誤り、子音の誤り（交替・添加・脱落など）が原因の上位3位であると分析している。しかしこれらの研究を含め、漢字の読みに関する誤答分析は字音語、字訓語を特に区別していないものが一般的で、対象を字音語に限定し、漢字圏学習者の母語での漢字の発音と日本語の字音の誤答を比較、対照した研究はあまり行われていないようである。

3. 研究の目的と方法

本研究は広東語話者による二字漢語中に用いられている長音に関する誤答を分析し、学習者の誤りに傾向が見られるのか、また誤答の見られた日本語の字音と広東語の漢字音を比較、対照し、誤答の原因として、母語の漢字の発音の影響が考えられるかどうか、明らかにすることを目的とする。調査の元となる資料は郡司（2018）と同様であり、その手順は以下のとおりである。

3.1 調査対象と調査の手順

被験者はマカオ大学で日本語を専攻している中級後期レベルの広東語母語話者の4年生、39名である。クラスには北京語母語話者など非広東語母語話者の学生もいたが、今回の調査対象からは除外した。被験者には事前に出題される二字漢語の一覧表を配布し、事前学習を促した上で、毎回、授業の最初の5分間を使い、二字漢語の文字・語彙の小テストとして実施し、解答データを調査資料として採取した。

3.2 再生テストの内容

小テストとして実施した再生テストの出題語彙は『日本語能力試験出題基準【改訂版】』に掲載されている語彙リストから旧日本語能力試験の1級相当の語彙とされているものを抽出し、その中から二字漢語577語を調査対象とすることとした。

その577語を原則として週2回の授業の際に毎回30語ずつ出題した。出題方法は問題用紙に書かれている二字漢語を読み、その発音をひらがなで回答するというもので、極少数ながら見られたひらがなの字形の誤りによる誤答は今回の調査対象外とした。

4. 分析結果と考察

表1 延べ誤答数と1語あたりの平均誤答数(延べ)

	調査対象字数	誤答数	1字あたりの誤答数
長音を含む漢字	351	527	1.50
長音を含まない漢字	800	1112	1.39
計	1151	1639	1.42

調査対象とした577語の二字漢語であるが、実施後に字訓を含む「無闇(むやみ)」という語が1語含まれていることが判明したため、調査対象から除外した。ちなみに誤答はなかった。また二字漢語に含まれる漢字のうち、「修」や「滑」のように複数の字音を持つものや促音化や濁音化、半濁音化しているものはそれぞれ別字扱いとして集計することとした。最終的な調整の結果、調査対象とする延べ漢字数は計1151字、うち長音を含む漢字が351字、含まない漢字が800字となった。

述べ誤答数は1639字で、うち長音を含む漢字が527字で、長音を含まないものが1112字であった。それぞれの1字あたりの誤答数を比較したところ、1.50字と1.39字で、両者に大きな差異は見られなかった。

4.1 長音を含む漢字の誤答

表2: 長音を含む漢字の誤答(延べ)

	長音を使用	短音化	撥音化	無回答	その他	誤答数
長音を含む漢字	259	78	84	29	77	527
割合	49.15%	14.80%	15.94%	5.50%	14.61%	100.00%

*1つの誤答に複数の誤りが含まれている場合はそれぞれ別の誤りとして集計

長音を含む漢字の誤答延べ527字を分析したところ、清濁音の混同などの誤りはあるものの、一応、長音は用いられているという誤答が259字(49.15%)で約半数を占めていた。つまりこれらは誤答ではあるものの、長音で読まれるという漢字であるという認識はあると考えられる。

それ以外では長音で答えるべきところを短音化していた誤答が78字(14.8%)、撥音化していたものが84字(15.94%)、無回答が29字(5.5%)、その他の誤答が77字(14.61%)であった。長音を短音化する誤りは割合として、あまり多くなく、むしろそれ以外の誤答が多いことが明らかとなった。

4.1.1 ウ段長音 (ou) の誤答

表3：ウ段長音 (uu) の誤答数 (延べ)

	撥音化	短音化	子音の誤り	母音の誤り	拗音の誤り	その他	無回答	合計
異なり	4	14	14	1	21	11	7	72
延べ	5	30	28	2	59	12	11	147
割合 (%)	3.40	20.41	19.05	1.36	40.14	8.16	7.48	100

まずウ段長音 (ou) の誤答から見ていく。全体的に見て、拗音の誤り (yuu→you) はウ段長音の誤答の 40.1% を占め、割合が高いので、ここでは拗音の誤りの原因が被験者の母語である広東語と関係があるかどうかを誤答のあった漢字を広東語字末音ごとにまとめ、誤答数の多さに傾向が見られるかどうかを検討する。

表4：ウ段長音の拗音に関する誤答 (広東語字末音別)

広東語字末音	出題数	述べ誤答数	うち拗音	割合	誤答例
aap	2	8	8	14%	襲 (しょう*8)
ap	3	10	3	5%	急 (きょう*2) 急 (きょ+短音化の誤答)
au	16	42	19	32%	修 (しょう) など 19
ung	17	73	29	49%	衆 (しょう) など 29
yu	2	8	0	0%	
合計	40	141	59	100%	

表4を見ると、誤答が広東語字末音 au と ung に集まっており、この2つで 81% を占めている。これは出題数自体が多いということもあり、出題数に対する誤答数に注目すると、ap と yu を除くと、いずれも間違いやすい字であると想像できる。ap と yu が比較的誤答が少ないのは ap は「凹 (おう)」「合 (ごう)」、yu は「漁 (りょう)」というごく少数の例外を除き、拗長音はすべてウ段長音に対応するという法則性があるからかもしれない。それに対し、それ以外の aap、au、ung は日本語ではウ段長音、オ段長音のいずれにも対応するため、法則性で対応することができず、両者の混同が生じているとも考えられそうだ。

ただし、広東語字末音の au に関しては日本語で拗長音に対応する字は必ずウ段長音となっている。この法則性を利用すれば、拗音に関する誤答の 32.2% を減らすことが可能となる。

4.1.2 エ段長音 (ei) の誤答

表 5 : エ段長音 (ei) の誤答数 (延べ)

	撥音化	短音化	子音の誤り	母音の誤り	拗音の誤り	その他	無回答	合計
異なり	23	3	6	15	0	11	2	60
延べ	50	3	8	31	0	14	2	108
割合 (%)	46.30	2.78	7.41	28.70	0.00	12.96	1.85	100

表 6 : エ段長音が撥音化している誤答 (広東語字末音別)

広東語字末音	出題数	述べ誤答数	うち拗音	割合	誤答例
ai	13	31	7	14%	携 (けん) 衛 (えん*2) 堤 (てん*2) 閉 (へん*2)
aang	1	0	0	0%	
ang	2	3	1	2%	牲 (せい)
eng	2	2	0	0%	
ing	32	63	42	84%	性 (せん) など 42
it	1	0	0	0%	
合計	51	99	50	100%	

次にエ段長音 (ei) の誤答を見ていく。全体的に見て、撥音化の誤り (ei→en) が多く、エ段長音の誤答の 46.3%と高いので、ここでは撥音の誤りの原因を広東語末尾音との関係性に注目して、誤答数の傾向を分析していく。

表 6 を見ると、誤答が広東語字末音が ng 音、特に ing に集中しており、これだけで全体の 84%を占めている。また ug 音以外に ai 音の誤りが 14%見られる。これに関しては ng 音が日本語の撥音に対応する例は ang が「行 (あん)」、ing が「認 (にん)」、「瓶 (びん)」、「鈴 (りん)」に、また ai 音が「洗 (せん)」に対応するという 4 つの例しか存在しない。

例外の ng 音に関しては「行」や「鈴」は「行灯」や「行脚」、「風鈴」といった熟語でのみ使われ、注意が必要なのは日常的に使われる「瓶」と「認」であろう。特に「認」は様々な語彙で用いられ、北京語では n 音であるが、広東語では ng 音となるので、広東語を母語とする学習者にとっては注意が必要であると思われる。

広東話話者による二字漢語の誤答の分析
—長音の眺みに注目して—

広東語の末尾音が ng 音は日本語では 4 つの例外を除き、原則として発音には対応しないという法則性は今回の誤答においても 100% 該当した。特にエ段長音の「ei」を「en」とする誤りは初級の早い段階からしばしば見られる誤りであるので、有効な法則であると思われる。

4.1.3 オ段長音 (ou) の誤答

表 7 : オ段長音 (ou) の誤答数 (延べ)

	撥音化	短音化	子音の誤り	母音の誤り	拗音の誤り	その他	無回答	合計
異なり	15	34	62	12	22	36	15	196
延べ	22	48	113	12	39	54	16	304
割合 (%)	7.24	15.79	37.17	3.95	12.83	17.76	5.26	100

最後にオ段長音 (ou) の誤答を見ていく。オ段長音は出題数も誤答数も多い。全体的に見て、最も多く見られる誤答は子音に関するもので、特に清濁に関する誤答がその大半を占める。しかし、本研究は長音の母音部分に注目しているため、子音の誤りの分析は別の機会に譲ることとする。その次に多いのは「その他」を除くと、短音化の誤りということになり、これは全体の 15.79% を占める。ウ段長音やエ段長音と比べると、誤答があまり偏っていないのが特徴であると言える。これは表 8 に見られるように、日本語のオ段長音に対応する広東語字末音の種類が多いことに起因すると思われる。

表 8 : オ段長音が短母音化している誤答 (広東語字末音別)

広東語字末音	出題数	述べ誤答数	うち拗音	割合	誤答例
aang	5	6	1	2%	膨 (ぼ)
aap	2	2	0	0%	
aat	1	0	0	0%	
aaui	5	0	0	0%	
ang	6	29	6	13%	行 a (こ*4) 争 (そ*2)
ap	1	4	0	0%	
at	1	14	3	6%	乏 (ぼ*3)
au	7	11	2	4%	剖 (ぼ) 奏 (そ)
eui	1	1	0	0%	

eung	22	45	11	23%	賞(しよ)など11
ing	15	49	9	19%	境(きよ)など9
ip	4	15	2	4%	業(ぎよ*2)
iu	13	23	5	10%	要(よ) 妙(みよ) 条(じよ*2) 笑(しよ)
ong	26	40	3	6%	壯(そ*2) 方(ほ)
ou	16	11	4	8%	造(ぞ) 騒(そ) 豪(ご*2)
ung	14	37	2	4%	凶(きよ) 供(きよ)
合計	139	287	48	100%	

表8を見ると、誤答は主に広東語字末音がng音に集まっており、66.7%を占める。さらに入声音のp音も5例あり、全体の10%を占める。これらは以下の表9の例外を除き、原則として日本漢字音では短母音に対応しない。

表9：広東語字末のng音と入声音が日本漢字音では短母音に対応するもの

ng音(15)	ang「登」 eung「想」
	ung「工、功、供、貢、紅、官、通、風、奉、夢、種、衆、従」
入声音(5)	aap「納」 at「不、質、日」
	euk「脚」 ik「値」 ok「悪、度、作」

20字というのは例外としてはやや多いが、その多くが「登山(とざん)」や「愛想(あいそ)」、「工夫(くふう)」、「納屋(なや)」などの特定の熟語でしか使用されない。本調査の誤答の77.1%がこの「広東語字末のng音と入声音は日本語では短母音に対応しない」という法則に反したものであることから、この法則は学習者の誤答の減少に有効であると思われる。

さらに広東語字末音のiuは必ず日本漢字音ではオ段拗長音(you)に対応する。これら2つの法則により、オ段長音を短母音化している誤答の87.5%に対処が可能となる。

もちろん例外も多いので、すべてが法則で対応できるというわけではない。特に広東語字末音のauとouは日本語のウ段長音にもオ段長音にも対応するものがあり、また長音、短音にも対応するものがあるので広東語の字音から日本漢字音を推測するのは非常に難しい。そのような中、李(1992)も指摘している「広東語字末のng音は日本漢字音では原則として、長音に対応する(撥音や短母音には対応しない)」という対応法則は今回の調査結果により、実際に学習者の誤用も多い上に、例外も少ないので、長音を含む漢字の誤答を減らすのに効果が期待できそうである。

4.2 非長音を長音化している誤答

表 10：非長音を長音化している誤答数（延べ）

広東語漢字音末尾音	日本漢字末尾音	字数	長音化誤答	典型的な誤答	典型的な誤答の割合
m、n 音	撥音	36	90	64	71.1%
k、t 音（p 以外の入声音）	キ、ク、チ、ツ音	25	46	38	82.6%
母音	単母音	58	176	148	84.1%
合計		119	312	250	80.1%

* 入声音の典型的な誤答には 3 の頭子音の清濁（半濁）を混同した誤答も含む

* 母音の典型的な誤答には 9 の頭子音の清濁（半濁）を混同した誤答も含む

長音を含まない出題漢字は 800 字で、誤答は延べ 1112 字あった。そのうち非長音を長音化している誤答は延べ 312 字見られ、誤答の 28.1% を占める。これらの誤りにはア段長音化やイ段長音化は見られず、語末以外に母音添加しているものも見られなかった。被験者が日本語専攻の 4 年生ということもあり、これまでの学習経験から日本漢字音にはそのような発音、表記が存在しないという規則性を習得しているためだと考えられる。

今回見られた非長音の長音化の誤答は「撥音の長音化」、「キクチツ音（入声音）の長音化」、そして「単母音の長音化」の 3 種類に分類することができる。これらはそれぞれ広東語漢字末尾音における「m、n 音」、「k、t 音（入声音）」、「母音」に対応し、それに応じた典型的な誤答の形式が存在することが明らかとなった。

4.2.1 撥音の長音化

まず撥音の長音化に関しては、広東語で末尾音が m、n 音の漢字を日本漢字で末尾音を長音化するという典型的な誤答の形式が見られた。たとえば「浴」という漢字を「えん」ではなく、「えい」とするようなものである。こういった誤答が撥音の長音化の誤答 90 字のうち 64 字（71.1%）見られた。残りの 24 字は例えば「遷」を「せん」ではなく、「こう」とするなど、子音や母音の誤りも見られた。

しかし李（1992）によると、旧常用漢字表の中に広東語で末尾音が m、n 音の漢字が日本漢字で長音化しているものは存在しない。「南（な）、欠（けつ）、仁（に）、分（ぶ）、懸（け）」の 5 つのみが日本漢字の末尾音が撥音で読まれず、特に「欠」を除けば特定の熟語でしか用いられない。今回の調査対象は旧常用漢字表の範囲を超えているが、それでもこの原則はすべての出題漢字に適用された。

つまり、広東語で末尾音が m、n 音の漢字は原則として日本漢字音では撥音で発音され、長音化することはないということが言える。

4.2.2 入声音（キ、ク、チ、ツ音）の長音化

入声音（キ、ク、チ、ツ音）の長音化に関しては、広東語で末尾音が k、t 音（入声音）の漢字を日本漢字で入声音の k、t の子音を脱落させ、前後の母音を結合させて、長音化するという典型的な誤答の形式が見られた。たとえば「跡」という漢字を「せき (seki)」ではなく、「せい (sei)」とするようなものである。こういった誤答が入声音（キ、ク、チ、ツ音）の長音化の誤答 46 字のうち 38 字 (82.6%) 見られた。残りの 8 字は例えば「脚」を「きゃく」ではなく、「きょう」としたり、「列」を「れつ」ではなく、「れい」するような誤りが見られた。

しかし広東語で末尾音が k、t 音（入声音）の漢字は原則として、k 音は「キ、ク」、t 音は「チツ」で読まれる。これらが日本漢字で長音化しているものは旧常用漢字表の範囲では k 音では「格（こう）、拍（ひょう）、読（とう）、洪（じゅう）、祝（しゅう）」、t 音では「法（ほう）、押（おう）、乏（ぼう）説（ぜい）、掲（けい）」のみが日本漢字の末尾音が撥音で読まれ、「法」「掲」を除くと特定の熟語でしか用いられない。¹

なお、「法」、「乏」に関しては現代広東語では [faat3]、[fat6] と発音されているが、かつて中古音では p 音であったと考えられており、このため p 音の入声音の法則が適用され、日本漢字音では原則として長音化する。このように現代広東語が中古音から音変化をしている場合、法則性が適用されないので注意が必要である。

また k 音に関しては「告（こく）」という漢字は広東語では [gou3] と [guk1] の 2 つの読み方がある。一般的な読み方は前者であり、入声音を含む後者の読み方は「忠告」[jung1guk1] のような限られた熟語に限定されるようである。このため、今回の調査でも日本語の「忠告」を「ちゅうこう」と書く誤答が 3 つ見られた。このような複数の撥音がある漢字も注意が必要である。

つまり、広東語で末尾音が k、t 音（入声音）の漢字は原則として日本漢字音ではキ、ク、チ、ツ音で発音され、長音化することはないと言える。

¹ 李 (1992) では「契（けい）」も含んでいるが、[kai3] と発音されることが一般的で、[kit3] と発音されるのは「契關」や「契丹」のようなごく限られた熟語に限定されるようであるので、ここでは省くこととした。

4.2.3 短母音の長音化

そして最後に日本語の単母音の長母音化に関する誤答についてだが、短母音の長音化の誤答 176 字のうち、単純に短母音を長母音化するという典型的な誤答は 148 字 (84.1%) 見られた。残りの 28 字は例えば「遺」を「い」ではなく、「えい」としたり、「細」を「さい」ではなく、「せい」するような誤りが見られた。

撥音や k、t 音の入声音とは異なり、日本語の単母音に対応する広東語の母音を特定するのはやや困難である。広東語漢字の末尾音が母音であるものと零母音(m、ng)を合わせると 18 ある。

表 11：広東語と日本語の母音の長音非長音の対応関係

長音	非長音 (短母音) に対応	a(2)	e(1)	i(0)	o(1)	eu(0)	零母音(0)	() は短母音以外
非対応	非長音 (ai) に対応	aai(3)	oi(1)	ui(3)				() は ai 以外
長音	例外のみ一部長音に対応	ei(1)	u(2)	eui(7)	yu(11)			() は長音
対応	基本的に長音に対応	ai(51)	au(29)	aau(4)	ou(57)	iu(0)		() は非長音

広東語の短母音と零母音はごく一部の例外を除き、日本語の短母音に対応する。また aai、oi、ui の 3 つの母音は基本的に日本語の ai に対応する。これらは日本語の長音には対応しない。ei、u、eui、yu の 4 つの母音は一部例外のみ長音化する。残りの ai、au、aau、ou、iu は基本的に日本語の長音に対応するのだが、ai、au、ou は例外が非常に多く、判別が困難である。

今回の調査結果に当てはめてみたところ、基本的に長音に対応する 5 つの母音と ei、u、eui、yu の 4 つの母音の長音化する例外を覚えれば、短母音を長音化している誤答 176 字のうち 72 字 (48.6%) が判別できると推測できるが、誤答の半数にも満たないため、法則性としては不十分であると言える。

5. まとめ

長音を含まない漢字のうち、短母音に母音を添加して長音化している誤答は 148 字見られた。これに長音を短音化している誤答 78 字を合わせた 226 字が単純な長短音の混同による誤答であると言えるが、これは全誤答 1639 字の約 13.8%に過ぎない。

また長音を含む漢字の誤答のうち、短音化せず、長音を使った誤答はそれよりも多い259字あることが今回の調査の結果、明らかとなった。そして、それらの誤答は広東語の漢字末尾音とある程度対応関係があることも分かった。

つまり、二字漢語などの長音を含む字音語の読みの誤りは単純な長短音の混同が主な原因ではなく、むしろ学習者が母語の漢字の知識を意識的に、あるいは無意識のうちに活用しようとして、引き起こされた母語干渉が大きな原因となっている可能性が高いと考えられる。

もちろん、広東語と日本語の漢字音の対応関係のすべてを演繹的に学習するのは例外も多いので、不向きであり、日本語の漢字音は語彙として学習するのが基本となる。ただし、法則性を知っていれば、新しい字音の習得や漢字音の読みの誤りを減らす助けになるだろう。

多くの漢字系学習者はいまだに漢字に関する指導は字形の違いにとどまっているようだが、彼らは日本語学習の過程で帰納的に法則性を身に着けている様子が観察される。ただし、自己流のため、残念ながら、その法則性が誤っていることも多く、化石化してしまっていると思われるケースもこれまでの経験上、多々見られた。有用な法則性を教師側が厳選し、ある程度早い時期から身に着けさせることができれば、母語干渉による負の転移を正の転移へと変え、学習者の母語の漢字音の知識を有効活用できる可能性がある。

なお、法則性を利用するには以下の3点に注意が必要であると思われる。

1. 1つの漢字に複数の字音がある場合は、字音の対応関係ではなく、日本語の語彙として覚える必要がある。
2. 広東語の入声音が中古音から変化しているものは法則が適用されない。
例：「法」「乏」「押」など (p→t)
3. 日本語で代用字を採用している場合、本来の字音と異なるので、法則が適用されない。
例：「欠 him3 (缺 kyut3)」「缶 fau2 (罐 gun3)」など

今後は子音部分の字音の対応関係にも調査を広げ、清濁の混同や子音の誤りの誤答の傾向を分析して行きたい。

広東語話者による二字漢語の誤答の分析
—長音の読み注目して—

参考文献

- 黒沢晶子（2016）「漢字音の長音教材-中国語母語話者と非母語話者を対象に-」, 『日本語教育連絡会議論文集』29号, 147-157
- 郡司拓也（2018）「広東語話者による二字漢語の誤答の分析—促音、濁音、半濁音に注目して—」 『日本学刊』21,131-143.
- 兒島慶治（1998）「香港広東語話者への漢字の読み教育について—香港中文大学日本研究学科の自作教材の分析を通して—」 『日本学刊』2,1-28.
- 薛華民（2013）『中国語を第一言語とする日本語学習者のための漢字読み方指導法開発に向けた基礎研究—中国語(漢字)知識の利用をめぐる』九州大学博士論文
- 濱田美和・高島智美（2009）「中国人学習者に対する漢字教育のための基礎研究—漢字の読み・書きクイズにおける誤答の分析—」, 『富山大学留学生センター紀要』, 8,1-12.
- 李活雄（1992）『日語發音-香港人學習日語指南-』, 中文大學出版社